

令和2年度の医療情報研修会を令和2年11月28日(土)に秋田県診療放射線技師会の研修センターを発信元にWebで開催致しました。

新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の感染拡大の収束が見通せず参加者の安全を考えて、Webで開催することに致しました。

今研修会の開催にあたり本番1週間前に通信テストを行い、参加者にはご不便をおかけしないように準備をして当日を迎えたのですが本番直前になって接続が滞る事態に陥り、当初の開始予定時刻を大幅に過ぎてのスタートとなってしまいました。この様なトラブルのため豊嶋会長からの開会の挨拶や視聴にあたって参加者への説明など冒頭の約15分程度が音信不通となってしまったことにこの紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

川又副会長の御尽力により何とか接続の正常状態を確保出来、その後は演者の方々の御協力を得てほぼ時間通りに進めることが出来ました。

一つ目の講演は、CTの造影検査を自動注入器を使って安全に行うための一つのツールであるCT造影剤情報管理システム『CEエビデンス』を導入している秋田大学医学部附属病院の白坂直哉さんから活用方法と運用の課題に関してお話しして頂きました。

エビデンスシステムは、業務の補助には有用なものであるが、システムを過信することによって逆に確認不足が生じてしまうという新たなリスクが発生し、リスクを完全にゼロにすることは出来ないので、基本は従来からの安全対策を遵守することが大切であるとお話しでした。

講演二つ目は、血管造影検査における被ばく線量の記録と管理の実際とその課題に関して、秋田県立循環器・脳脊髄センターの加藤守さんからお話しして頂きました。

本年4月から、血管撮影検査において線量記録とその管理が義務付けられたことに伴い事実上、透視基準線量と臨床線量の二つを管理していかなければならないことになり、頭頸部領域では管理疾患項目が細かく分類されて記録管理が大変であるが、線量管理ソフトがなくてもExcelで十分に管理はできるとのことでした。DRLとの比較は、プロトコル変更の前後で線量を比較し適正化を図ることが求められるとのことでした。

最後の教育講演は、熊本大学病院・副診療放射線技師長の池田龍二先生より災害に備えた医療画像情報管理とBCPと題してお話を頂戴致しました。

昨今地震、大雨や台風による風水害など大規模な災害が全国各地で数多く発生しているなか、災害に備えた医療画像情報管理とBCP策定の必要性として、まずは非常時において優先業務とは何かの洗い出しを行い、ボトルネックリソースを抽出してその代替策をとることが求められるとのことでした。大規模災害における経験を共有し、想定外の事態であったといわず、想定不足を出来るだけ少なくすることを目

指していかなければならないとのお話でした。(会員 34 名参加)

(文責 小林)

